おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和５(2023)年
５月号
通巻 633 号
毎月23日発行
（題字　矢追日聖）

★発行日　令和５年５月23日
★発行所　大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町１の12
☎(0742)45-1192
★印　刷　大倭印刷株式会社
★定　価　１部　３００円
年間購読料3,500円（送料共）
★郵便振替　01050-6-67002
大倭出版局
URL http://www.ohyamato.jp

生駒山と矢田丘陵（手前）を望む　　故・井手泉さん遺作（３頁・水島照美さん「足あと足おと」に関連文）

再録 昭和46(1971)年6月23日発行『すさのお』第57号より

こんな場合もある　～憑依霊の一面～（一）

法主　矢追日聖（満59歳）

この後、昭和55年1月号『おおやまと』第１５７号に法主様が文化行事報告として「慰安と鎮魂の祈りの旅」を書かれた折には、川田千代さんは本名の山田（八重子）さんとして書かれていますが（野草社刊『ながそねの息吹』所収、２１３頁）、ここでは仮名のままとします。

（編集部）

大倭教の旗印のもとに私は多くの人々と調和交流を図りながら、ひたむきに神ながら信仰（自然崇拝主義）に生き甲斐を見出してきた。

ここに二十六年、想えば数知れない帰依者達から私は幸いにもまだ一度の強要もされないで今日に至った。換言すれば、今の世にキラ星と居並ぶ欺瞞（ぎまん）宗教企業家によって墜落させられなかったという喜びである。

私は今日まで多くの人々の現実生活から起こる各種の相談に応じてきた。今なお続けているが、宗教の本質を求めて訪れる人は殆ど稀（まれ）である。その大部分はただ強欲張りか、さもなければ自分がつくった苦悩を神仏の加護によって消滅させようと願う（たい）横着者の類であると言える。

私は嘆いているのではない。静かに心眼を開いて見るならば、この種の人間も何かの「命（みこと）」を、加美から賦与されてこの世に生まれ出た者である。加美の心に順応することが唯一の生き甲斐である私は、如何なる来訪者に対しても「命（みこと）もち」の人だという心で拍手を打って迎え、大切に扱い、無差別平等な応答を繰り返してきた。彼らがあることに

よって私の「命」が必要になってくる。「命」は相対的表裏の形で仕組まれているが、「命」の価値、尊さは彼我平等になっている。つまるところ加美の摂理は不可思議な味があってなかなか愉快である。

体に飛び込む不動さん

昭和四十五年十一月十六日（月曜）の正午だった。名古屋から川田千代さん（仮名六十一歳）は紹介者の婦人に連れられて初めて私のもとへ見えた。

川田さんは顔色は青ざめ浮きぎみで、軽い喘息のような苦しみを見せながら初対面の挨拶をする。煽る心臓を抑制しながら、彼女はここ数年間の苦情をぽっぽっと話しかける。波打つような呼吸の間から絞るように出す声は悲愴な雰囲気をかもし出し、聞く私の方もかなり辛かった。要約すると次のようである。

数年前のこと、身内にある事情があって千代さんは、不動明王を御本尊に祀り人助けをしているある行者さんのもとへ救いを求め信仰の道に入った。するとその御本尊である不動さんが千代さんに乗り移り、頭の中であれこれと指示するようになった。

声が聞こえたり、金色の龍体が顕われたり、不動尊の姿が見えたりする。不動さんは千代さんに神通力を与えてやったから行者になれ、どうあってもさせる、行者になれば立派な衣装をつけ信者からは頭を下げて先生先生と崇められ、たんまり賽銭も運んでくるから、一生、いい恰好をして楽に暮らせる。こんないい話どこにある？と言う。

千代さんはこれが神の道か？　けしからんと頑強な抵抗を続けた。時には財産家の名指しをして、その人を信者に入れ、その財産を不動さんに供えるように説得せよと命令してくる。千代さんははねつける。聞かなければ命を取るぞと不動さんは立腹する。

こんなところから、昼となく夜となく不動さんから受ける障害は日増しに苛酷さを加えてきた。千代さんは、不動さんが頭に入って霊示していると思い込んできたが、どうもおかしい。逆に自分の頭が変になっているのかもしれない。幻覚幻聴ではないだろうか？と思いつき、三年前に大学病院神経科へ六ヶ月入院して診療を続けてもらった。結果、医師達は不可解な病と称して手を放してしまう。

千代さんは頭の頂を押さえて、不動さんがここから喋るのでブヨブヨして腫れ上がっていると説明して示す。時には肢体のあちこちを刃物で突き廻すような痛みがあると思えば、あちこちに内出血の班点が皮膚に出たり、心臓が煽られて意識不明になったり、肛門をつめ腹をポンポンに張らせたり、階段から降りる時に足をとって転落させたり、赤信号を青に見せて命を取ろうと図ったり、茶碗を洗っていると両手が硬直して食器が裂けて割れたり、味覚を麻痺させて味付不能にしたり、挙げれば切りのないことだが、それはそれは世にも稀な悪霊の働きであるにも拘らず、よくもその苦痛に耐え忍び、今なおその抵抗を続けてきた千代さんの強靭な精神に、私はいたく頭の下がる思いがしたのである。

千代さんは、こんなに苦しめる神さんがあるからには、必ず私を助けてくれる神さんがあるに相違ない、何処かにある。自分さえ誠心をもっておれば、いつかはその神さんに巡り合わせていただくというただ一念の祈りが、自分をここまで支えてくれたと述懐する。

畜生と畜生霊

こうした話を聞きながらも、千代さんの体に纏いつくかの如くに悪質な固有霊が、畜生の霊波を放ちつつも右往左往しながら逃げまどうているのを私は捕えていた。それがいわゆる不動明王の実体である。

信仰する人は宗教に対しては素人であるが、彼らの気持から言えば、信仰の御本尊が仮に神さん仏さんであれ、お稲荷さん不動さん巳さん聖天さん弁天さん恵比寿さんなどであったとしても、彼らは殆どその区別なく一律に、霊験あらたかな神さんとして信仰する態度をもっている。

ところが事実は眉唾もので、千代さんのような真面目な心で信仰に入ったばっかりに、とんでもない大被害を蒙って苦悩を続けている人があるということを知らねばなるまい。

先ほど、畜生の霊波のことに触れたので、ここで一寸蛇足を加えておく。私は現象界の総てのものに生命体があると信じている。便宜上その生命体を霊とも呼んでいるにすぎない。霊は生命体を意味しているので、生きとし生きるものの総てに宿っているものである。

霊は電気に似た霊波を常に放射している。霊には人間や畜生の区別がない。ただし霊は宿る器に応じた働きに限られてくる。狐狸の場合、人間の場合、その肉体、習性、本能による範囲内で霊格が定まる。また霊能力は霊格によってその範囲が決まるものである。畜生の霊波は格の低さを表わすもので畜生そのものではない。（つづく）

昭和四十六年六月十五日、日聖記

足あと足おと

2023年春 伊良部島の旅より

兵庫県明石市　水島照美

2023年4月初旬、新4年生になったばかりの娘の春休みに、伊良部島へ二人旅に出ました。今、私と娘は兵庫県明石市に暮らしています。最寄りの空港は神戸空港。

その神戸空港からは伊良部島の隣島にある下地島空港への直行便が飛んでおり、沖縄本島へ行くよりも航空運賃が安く、行きやすいことが分かって大喜びで旅の計画を立てました。その時のことを書こうかなと思います。

その前に、少し私のことを書きます。

❖私のこと

伊良部島へは14年前、2009年6月に当時の夫BOO（横井英夫）と初めて訪れています。ハーブ畑をしている近角さんにご案内いただいて、伊良部島の大自然の神様を感じる聖地へ行った時、その場その場で直接胸に響く感動があったこと、私もまた大自然の一部だと感じて、ただただうれしかったこと、忘れられません。いつかまた、もう一度伊良部島へ行きたいねと何度もBOOと話していました。

それから年月が流れて。私は未亡人になり、再婚して母になり、2度目の未亡人になり、シングルマザーになりました。

6年前、3歳になったばかりの娘とスタートした母一人子一人の暮らしは、何が何だか分からないまま、みなさんに応援され見守られる中で始まりました。大人一人でできることには限りがあり、日々の家事育児と仕事（保育園に勤務していた）は、ほんの少しずつしか積むことができず、大人の頑張り過ぎは子どもへの皺寄せになることも経験して、無理せず諦めることも多くなり、気づかないうちに暮らし方や考え方が何となくこじんまり小さくなっていました。

塵も積もれば山となると言うけれど、暮らしは塵をティースプーンで何度も運んでうっすら重ねるような感じで進んでいました。私のような状態をワンオペと言うのだと友人に言われて初めて、自分の状況を客観的に理解しましたが、それが問題だとか何とかしなければと思うこともなく過ごしてきました。

低空飛行だけれど、何とかうまく暮らせていると思っていましたが、一昨年の秋、私は突然職場に行けなくなってしまいました。すすめられるまま受診すると「しばらく自宅療養が必要」と、水戸黄門の印籠のように私を守ってくれる診断書が出てようやく、私は今、私を何より大切にして私に向き合う必要があるのだと理解しました。

自分のための休養は、後ろめたい気持ちと時間をどう使ったらいいんだろうという気持ちで、そわそわしていました。しばらく経つと身についていた緊張が緩んできたのか、体が重く感じるようになり、娘を学校に送り出してから帰ってくるまでのほとんどを布団の中で過ごすような時期が訪れ、何をしようにも気力が持ち上がらず、電話に出ることもできない日もありました。

休養開始から3ヶ月ほど経ったある日、私が精力的に行動していた頃の旧友とオンラインで話す機会があり、「照美ちゃん、森に入って木々や植物たちと無言の対話をしてきたら?」とすすめられました。

「無言の対話」という言葉に心がときめきました。大自然の中で無言の対話をする私を想像したら、心に風がふわりと吹いた気がしました。

さっそく翌日から歩き始めました。月の半分以上を修行僧のように森の中で過ごしました。場所は、特に意味を込めて選んでいませんが、須磨浦公園の源平合戦のあった山（旗振山、一の谷周辺）でした。家から行きやすかったからです。

山へ登る前には、淡路島に向き合う大蔵海岸の海に「行ってきま～す」と挨拶してから山に入り、森の中で大自然に囲まれて時間を過ごし、時にはウクレレを弾きながら歌い、それを動画に撮って配信して山と遊びました。山を降りたら海に「ただいま～」と挨拶して家に帰るということを続けているうちに、心も体も整っていきました。

気力が半分くらい戻ってきた昨年3月、井手さん（白髭メガネのへび学者）の告別式に伺いました。「へびの唄」のCD音源（故BOOの声）が終始流れる会場で、色々なことを思い出していました。

私も「へびの唄」を歌いたいと思い立ち、式の中で歌わせていただいた時、体中の血が騒いで私は「これ」がしたかったと思いました。「これ」とは、正しい言葉が分かりませんが、肉体を持たないものと肉体を持つものとの間に立って、歌うことでした。

その気づきは、井手さんからのプレゼントだと思って大切に生きていこうと思っています。

そしてその後すぐに休養中のまま退職し、歌と出会いの旅を10年ぶりに再開しました。私は今、歌いながら旅をしています。距離に関わらず、毎日家を出たら旅人です。可愛い旅の相棒は、娘の

遥香です。歌いながら旅をして、たくさんの縁のある大自然や人々に出会い、私も娘も育ててもらっています。この1年間歌えば歌うほど、私は私を取り戻していきました。

❖鍋底へ

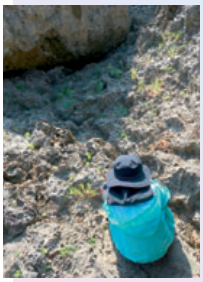
今回の伊良部島来訪の一番の目的は近角敏通さんに会うことでした。近角さんとは秩父の賑栄(にぎわ)い塾以来、約8年ぶりの再会です。「ミサイル基地のない平和な島」と書かれたステッカーを車につけて下地島空港に迎えにきてくれました。

近角さんの大学時代のお友達が同じ日程で訪れているので、合流して大人4人と娘と総勢5人が、この日一期一会の旅の仲間になりました。

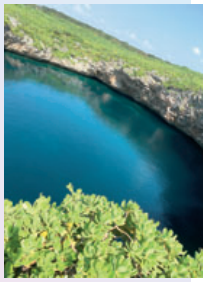
「今日はいいお天気で暖かいから、鍋底かな。鍋底にご案内しましょう」。早速近角さんから提案があり出発します。

通り池の手前の駐車場で、水着に着替え、身支度を始めると娘は大喜び。

「まま～　これから泳ぐの？　うれしい～　泳ぎたかったの～」。その声を聞いて私は内心うわぁ～～～～～　どうしよう……。浜辺に行くと思ってるだろうなぁ。たぶん。



▼崖を降りるのを躊躇する遥香



▲通り池

あんなに喜んじゃってるけど。鍋底までの道のり、ほぼ垂直の崖を登ったり降りたりって想像してないだろうなぁ。黙っとこ……。

駐車場から少し入ったところの拝所で、娘と私は並んで立って名乗り、まず通り池を目指して歩き出しました。

遊歩道を歩いて行くと左右両側に竜の目玉のような通り池が見えてきます。「まま？　ここで泳ぐの？　深くない？」。いやいや　ここじゃないよ。ここはご挨拶だけ。もっと先に行くよ。

「よかったー　ここかと思って、びっくりしちゃったー」。いやいや……。鍋底着いたら、さらにびっくりすると思うわ～。と心の中で呟きながら進みます。

通り池と呼ばれる深い青色の二つの池は、底で繋がっていると言われていて、さらに海とも繋がっていると言われています。

私が縦笛を出して吹こうとすると、娘が慌てて寄ってきて、「まま、他のお客さんもいるからやめた方がいいんじゃない？　音は出さない方がいいんじゃない？」。娘は私が大自然の中で感じるまま歌ったり音を出すことに慣れてはいるけれど、観光客が同じ場にいる時には遠慮した方がいいと考えたようです。

「大丈夫よ」と答えて、通り池とおしゃべりするみたいに笛を吹き終えると、観光している人たちが拍手してくれたのを娘がとても喜んで、「ままぁ～　みんなが素敵な笛だね～って言ってたよ。うれしい～」と伝えてくれました。内心ヒヤヒヤしていたのだと思うけれど、ちょっと変わってる母の行動も、こんなふうにして理解を得ているところです。

しばらく行くと、以前は鍋底まで続いていた遊歩道が途中で不自然な行き止まりになって、柵で閉じられていました。何度修理しても台風で遊歩道が壊れてしまうので、ここまでになったとのことです。大切な場所は観光地から外れたと知り、なんだかホッとしました。

私たちは、閉じられた遊歩道の柵を乗り越えて道なき道を行きます。ゴツゴツした岩場は平坦ではなくどちらかといえば危険で、4人の大人に励まされながら歩いていた娘も次第に無口になりました。引き返すこともできず、さらに大変なことが続く見通しが立ち「もう無理」と足を止めました。

一方で、此処まで困難な道のりを進んできたことは自信にもなって、見守ってくれる大人たちに信頼を置いている様子はよく伝わってきます。「一緒に行こう。大丈夫。頑張ろう」と旅の仲間にたくさん励まされ、そして再び歩き始めました。

鍋底の淵に到着した後、お水に浸かるには産道をくぐり抜けてこの世に産まれ出るように岩の隙間を降りて行きます。ようやく池の水にぽちゃんと産まれ出た大人たちが、水に浸かって泳ぐのを見ながら、ゆっくり時間をかけて娘は大自然に心をひらいていきました。

潮が満ちたり引いたりするたびに水面がぐぐぐーッと押し上げられるように上昇下降する中で浮いていると、大地の鼓動そのものになったようで、私も大自然の中の小さな小さな命の一つなんだなぁという実感が湧いて心がふるえます。

娘もそのうち足首まで、膝まで、腰まで水に浸かると「まま、手つないでいてね」と言って水に入りました。２０２３年、娘の初泳ぎは鍋底。水の神さまに抱かれてゆっくり娘のペースでリラックスしていきました。（次号へ続く）

「神通力如是（じんずうりきにょぜ）」の真意をさぐる　第二十五回

大倭教の源流にさかのぼって

今回の原文では、中将姫による語りの後、当時の日本に迫っている危機や罪障消滅について、倭姫が奇稲田姫の意も汲みながら切々と語ります。

原文

十一月十九日、夜八時、於鳥見庄山

倭姫、神楽。

「大八洲嶋、秋津島根ノ日本ノ、我ガ天皇（スメミマ）ノ大稜威、光ハ代々ニ輝キテ、幾千代マデモ日本ノ竹ノ園生ノオン榮エ寿ギマツル。竹ノ園生ノオン榮エ、寿ギマツル」題目。

十一月二十日　朝八時、於鳥見庄山

中将姫

「ワラハハ中将姫、オン前ケガシ奉ル。八百萬余ノ神等、御題目ノ功徳ニヨッテ母上ノ罪障ヌグイトリ玉ヘ。題目。神神ヨ、吾レ不憫トオボシメサバ何卒母上ノ罪障一日モ早ウヌグイトリ玉ヘ、姫ヨリモオ願ヒ申上ゲ奉リマス。母ノ罪障ハ吾身ノ罪障トモニ吾レノ罪障モヌグイトリ玉ヘ。題目。

奇稲田姫命オンモノ申シ奉ル。中将姫私事ノ為メ御前ケガシ奉リ、ヒトエニ御詫申上ゲ奉ル。奇稲田姫命吾レヲ不憫トオボシメサバ母上、吾レノ罪障ヲ一日モ早ウヌグイトリ玉ヘ、オン願申上ゲ奉リマスル。オ暇チヨウザイ仕ル」

仝朝、九時半

倭姫、挨拶、神楽奏ス。

「我ガ日本ノ皇孫ノオンヨハヒ、幾千歳ノ後マデモ代々永久ニ榮エ行ク。

君ヶ代ハ、千代ニ八千代ニ寿ギテ、大内山ノ松ノ緑ニ色ハエテ、竹ノ園生ノ弥榮エ、アーメデタヤナ、メデタヤナ。皇統連綿、萬世一系、我ガ日本萬々歳①」題目。

「真ノ我ガ日本ヲツクルニハ、我皇孫（天皇）ノ身近ニ侍ル奸②臣ドモヲ祓ヒ候ヘ。彼等ハ悪魔ノ変化デアルゾヨ。皇孫ヨ真ノ妙法唱ヘラレヨ。『我ガ日本ノ事ヲ思ヘバ真ノ妙法〜、妙法〜、妙法〜、妙法〜、妙法〜』

我ガ日③本ニハマダマダ罪障ガアル、真ノ題目トナヘ之ノ罪障消滅ナサン。其時ハ皇孫ノ稜威ハ八紘一宇ニ輝キ渡リ、御恵ヲ享ケル者幾千萬億数限リモ無シ。此レハコノ倭姫ノ言葉ニ非ズ、大倭日高見国鵄杜ニ鎮リ坐マス奇稲田姫ノ御託宣ナリ」

倭姫、慎シミテ御取次申サム。

「我ガ日本ハ今三④方ヨリ悪魔ニ攻メラレ、如何ヤウニスル事モ能ハズ、皇孫（天皇）一人、モッタイナクモ御心悩セラレ候ヒシガ、其ノ御心ハ奸臣ドモニ遮ラレ、一億民ノ心ニ伝ハラズ、之レコノ日本ノ罪障ナルゾ。コノ日本ハ皇孫（天皇）ノ勅⑤裁アル国、此ノ尊イ国ガ奸臣ドモニ操ラレテドウシヤウ。其ノ様ナ事ハ出来ル筈ガ無イ。今ニ見ヨ、臣民ガ倒サズトモ天上ニ坐スハ百萬ノ神等、正法、妙法ノ剣（ツルギ）モテ変化ノ者ヲ遣ハシ悪魔退治ナサン。頻⑥々ト起ル異変ハ何ヲ物語ルゾ。臣民ヨメザメヨ、一億民ヨメザメヨ、正法妙法唱ヘカシ。今、日本ハ危機迫リ来レリ、悪魔ハ爪ヲ研イテ居ルゾヨ。皆者、暇アル時ハ真ノ題目、我ガ日本ノ為、皇孫（天皇）ノ為、唱ヘラレヨ。我等モトモニ天上界ニ於テ我日本ニ仇ナス悪魔退散シクレン」題目。

本⑦日午後一時半、「空襲、宣⑧戦布告、露西亜」字にて現はる。

日聖云ふ、右は実相なり。今日之の時

刻（午後一時半）に於ける、露西亜の思ひが霊界に一実相となりて現はれているものも。やがては実現する事と思ふ。

註釈

①萬世一系（ばんせいいっけい）

天子の血統が永遠にわたって、かわらず続くこと。大日本帝国憲法（明治22年）一条「大日本帝国は万世一系の天皇之を統治す」

（小学館『日本国語大辞典』による）

「みんな一人一人が万世一系や」とはいつも法主の言葉であった。（杉本）

②奸臣ドモヲ祓ヒ

・奸臣

心のねじけた家来。

（岩波書店『広辞苑』による）

心の悪い家来。（平凡社『大辭典』による）

悪心をいだく家臣。奸悪な家来。

（小学館『日本国語大辞典』による）

・祓う

⑴じゃまもの、無益なもの、不用なもの、害をなすものなどを除く。

⑵神に祈ってけがれや災いを取り除く。清める。（三省堂『大辞林』による）

「神通力如是」の11月21日のところで、倭姫の発言として「…大君ハ御心イタク悩マセラレ、側近ノモノドモ相談致ス人一人モ無シ」とある。

③日本ニハマダマダ罪障ガアル

ここしばらく中将姫個人の罪障消滅が語られていた「神通力如是」であったが、ここでは日本の国としての罪障が言われている。人と人が集まって作る数々の罪障は、やがて一つの国としての罪障となるのだろうか？　このことについても法主は様々な場で、様々に書かれまた語られているが、ここではその中の一つ昭和38年4月23日の月次祭での法話を紹介し、皆さんのご理解の一助としたい。

《「日本の罪とその禊」

近くは大東亜戦争から始まって、徳川時代、またその前は戦国時代とか、ぼつぼつとでも日本の過去の歴史を見た場合に、とにかく闘争また闘争と、人間に与えられた知恵というものを、いろいろな悪い方に利用してきています。人を騙し、権力とか腕力とか武力とかによって社会を制覇し、天下の実権を取ろうというような考えでもって、今日までやってきているんですね。それで、五百年も千年も前から、そのような罪悪を積み重ねた人たちが霊界におるんです。

過去の、そういう罪を持って霊の世界で苦しんで生活してきた人たちが、仮に今のこの平和な時代に生まれて来たとしても、前の世から持って来た悪因縁によって人を斬ったり人を殺したり、というようなことを本質的にやりたくなってくる。悪いことだとわかっていながらでも、悪いことをせざるを得んというような心境になってくるということは、前の世から持って来た悪因縁がそうさせるんです。

そういう人たちがたくさん日本にも生まれて来ておったがためにですね、アメリカというような大国、あるいは世界を相手にでも戦争を引き起こしているんです。これは現代の人間だけが悪いんじゃないんですね。日本の国自体にそうした一つの宿命的なものがあったわけなんです。》　（『おおやまと』平成20年4月号より）

④三方ヨリ悪魔ニ攻メラレ

この「三方ヨリ」というのは二つの解釈がありうる。ひとつには内なる悪魔である皇孫をとりまく政界や軍隊、宮内の天皇の側近達が三方から攻めているという解釈。またもう一つの解釈として、中国、欧米、ロシア（ソ連）という三つの勢力からの圧迫という解釈である。以下に二つ目の解釈としての資料を載せておく。

⑴「日中戦争」（三方・西）

《１９３７年（昭和12）７月の蘆溝橋（ろこうきょう）事件に始まり、１９４５年８月日本の降伏で終った、日本と中国との全面戦争。日中十五年戦争という場合は、１９３１年９月の満州事変を起点とする。

中国では一般に抗日戦争とよぶが、第二次中日戦争という言い方もある。》

（小学館『日本大百科全書』「日中戦争」による）

⑵ゴードン・Ｍ・バーガー「アメリカからみた　太平洋戦争」　（三方・南）

《…昭和15年９月から太平洋戦争勃発に至るまで、日米関係は袋小路に追い込まれていた。局面打開は、両国の原則における妥協によるしかなかったが、双方ともに肯じないところだった。ハルの一貫した反対を抑え、ルーズベルトはモーゲンソー、スチムソンの助言に従い、日本に対する「警告」「阻止」手段として経済・金融上の禁輸を実施した。…日本が追い込まれたと知ったＪ・グルー駐日大使は激化する一方の日米間の手づまりは、戦争に終わるのみと、いみじくも予言した。》

（毎日新聞『一億人の昭和史③』による）

⑶「平原の死闘・ノモンハン事件」（三方・北）

日中戦争が泥沼に入った時期の昭和14年５月に、外蒙古と満州の国境で勃発した日本陸軍とソ連との大規模な衝突で、日本軍が戦死者八四四〇人を出す大敗北を喫し、９月に停

戦協定となった事件。
（毎日新聞『一億人の昭和史②』による）
以上時のスメラミコトの心境は文字どおり〝内憂外患〟であった。

⑤勅裁
天子の勅裁。天子のさばき。天子の決定。
（大修館書店『新漢語林』による）
明治憲法下で、天皇が他の機関の参与を待たず、自ら行う裁断。（岩波書店『広辞苑』による）

⑥頻々起ル異変
しきりと起こる異変とは、豪雨や地震などの自然現象や災害のことなどと思われる。「神通力如是」の中でも、《(11月9日) 近頃、朝の太陽色変じ乳色夕日紅の如し。(11月28日) 豊橋に大旋風。50名死傷。２００戸倒半壊。初冬稀な豪雨異変。》等の異変が記されている。

⑦本日午後一時半、「空襲、宣戦布告、露西亜」字にて現はる。…やがては実現する事と思ふ。
昭和14年5月にソ連(ロシア)との間にノモンハン事件が起き、日本は大敗し停戦協定を結んだ。その後昭和16年4月に日ソ中立条約がモスクワで調印されている。有効期限は5年であったが昭和20年4月ソ連は不延長を通告し、有効期限内の8月8日に対日参戦した。こうした形で霊界での実相が実現してしまったのである。

⑧宣戦布告
他国に対し、戦争に訴えることを宣言・公布すること。開戦宣言。
（岩波書店『広辞苑』による）

現代語訳

昭和16年11月19日　夜8時　鳥見庄山に於いて
倭姫　神楽。
倭姫「多くの島々によって成り立っている日本列島、その日本の天皇の御威光は代々に輝き、竹林の映える大倭鵄杜はいつまでも栄えていくことをお祈り申し上げます。栄えていくことをお祈り申し上げます」

11月20日　朝8時　鳥見庄山に於いて
中将姫「私は中将姫です。奇稲田姫の御前を穢させていただきます。数多の霊界の高級なご霊人の方々に、お題目の功徳によって義母の罪障をぬぐい取って下さるようにお願いいたします（題目）。霊界の皆様方、私を不憫と思われるのであれば、どうぞ義母の罪障を一日も早くぬぐいとって下さい。私からもお願い申し上げます。義母の罪障はわが身の罪障です。私の罪障もともにぬぐいとっていただきますようお願いいたします。
奇稲田姫様に申し上げます。中将姫、私事のために御前を穢しましたこと、ひとえにお詫び申し上げます。奇稲田姫様が私のことを不憫と思っていただけますならば、義母と私の罪障を一日も早くぬぐいとって下さるようお願い申し上げます。おいとまちょうだいさせていただきます」

同日朝　9時半
倭姫、挨拶、神楽奏する。
倭姫「わが日本の皇孫は長寿を全うされ、代々永久に栄えていきます。
スメラミコトの世はいつまでもめでたく栄え、大倭鵄杜の松の緑は色鮮やかに、竹の園生は弥栄え、ああめでたいことです。めでたいことです。ニギハヤヒノミコトからはじまる皇統は、いつまでも万世一系に続き、わが日本は万々歳です（題目）。
真の私達の日本を創るには、私達の天皇の身近にいる天皇に仇なす家来共を除き去って下さい。彼等は悪魔の変化したものなのです。天皇よ真の妙法をお唱え下さい。私達の日本のことを思われるなら真の妙法、妙法、妙法、妙法～～」
倭姫「私達の日本には、まだまだ罪障があります。真の題目唱え、この罪障を消滅させるのです。その時は天皇のご威光は世界中に輝き渡り、恵みを受ける者は何千万億という数限りもないほどです。これは倭姫の言葉ではなく、大倭日高見の国、鵄の杜に鎮まり坐す奇稲田姫のご託宣なのです。
倭姫、慎んで奇稲田姫様のお取次ぎを致します。
私共の日本は今、三方から悪魔に攻められていて、どうすることも出来ません。天皇お一人が、申し訳なくも、その御心を悩まされておられるのですが、その御心は天皇に仇なす家来共に遮られ、一億の国民の心には伝わっていません。
これがこの日本の罪障なのです。この日本は天皇が直接治められる国です。この尊い国が、仇なす家来共に操られて、どうするのですか。その様なことが許されるはずはありません。今に見ていなさい、日本の臣民がその家来共を倒さなくても、霊界におられる数多の高級な霊人達が正法、妙法の剣をもって現界人と変じた使いの者を遣わして悪魔を退治させます。度々起こる異変は何を物語るのか。臣民よ目覚めなさい、一億の国民よ目覚めなさい。正法妙法を唱えなさい。今、日本は危機が迫って来ています。悪魔は爪を研いでいます。皆さん、暇のある時は真の題目を唱えなさい。私達も一緒に霊界において、私達の日本に仇なす悪魔を退散させます。（題目）」
法主註　本日午後一時半、「空襲、宣戦布告、露西亜」が文字にて現れる。
日聖は言う。右の文字は実相であり、今日のこの時刻（午後一時半）におけるロシアの思いが霊界にこの実相となって現れているもので、やがては実現することになると思う。

あじさい日誌

4月8日　午後2時から大倭大本宮で須佐緒祭が行われました。この日は昭和45年4月8日の法話をお聞きしました。（平成19年4月号『おおやまと』に「すさのおの自覚―お互いの結び合い」として掲載分）

4月9日　奈良県知事、県会議員選挙投票日でした。

午後2時から拝殿において大倭会主催禊会が開かれました。

4月15日　大倭神宮において箭負祭（おいまつり）が行われました。久しぶりの雨の中でした。

4月23日　大倭大本宮月次祭。

昭和45年4月23日の法話をお聞きしました（本紙未掲載）。

午後、交流の家でFIWC定例委員会でした。

午後4時から大倭会館で大倭会役員会が開かれました。詳細は下欄の大倭会通信参照。

5月6日　大倭神宮月次祭。

夜、大倭会館で邑倭の会。

大倭安宿苑では

4月14日　長曽根寮機械浴槽入替えについて公益財団法人JKAの補助金が決定し、奈良競輪場で通知書交付式。（菅原園）

5月5日　画用紙製の兜で男性達が一人ずつ写真撮影。あまり大きなことはできませんでしたが、端午の節句の雰囲気を喜んで頂けました。（須加宮寮）

4月16日　3年ぶりに奈良県障害者スポーツ大会（卓球）に3名が参加、全員メダル獲得。

4月27日　単独防災避難訓練（火災）で玄関先に避難。（長曽根寮）

4月18～19日（デイ）　鯉のぼりの作品作りをしました。

4月（特養）　大きな桜の絵やカレンダーを一緒に作成して、「花見に来ている気分や」と雰囲気を楽しみました。（茂毛路園）

4月12日　4月の誕生会（4名）。全員でご馳走の昼食やケーキのおやつでお祝いしました。（八重垣園）

不定期に、ミニカラオケ大会を行いました。

あんない

＊月次祭（大倭神宮）

6月6日(火)　午後2時より大倭神宮にて。

＊大倭会主催禊会

6月11日(日)　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。6月は12月とともに大禊ぎの月です。

＊月次祭（大倭神宮）

6月15日(木)　午後2時より大倭神宮にて。

＊月次祭（大本宮）

6月23日(金)　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

大倭会通信

令和5年度第1回役員会（幹事会）が、去る4月23日に出席者13名で大倭会館に於て開かれました。冒頭で各幹事や顧問からの近況報告がありました。顧問である櫻井節子さんからは、昨年の佐渡への文化行事の感想も含めたメッセージが送られてきたので、後から紹介させていただきます。

▼議題は令和4年度の会計報告及び令和5年度の事業計画と予算についてでした。現在の会員数は約130人で、予算規模も400万円弱の小さな活動体ですが、激しくゆれ動く社会の中で大倭の心を大切にしながら着実に歩んでいきたいと思っています。

▼令和5年度の宿泊文化行事は10月1日（日）～2日（月）の2日間を予定しており、行先は和歌山県の龍神温泉方面等を検討中です。

▼また、秋の文化講演会は11月12日（日）に、前京都大学総長でゴリラ研究者として知られている山極壽一さんを迎えて開く予定ですので楽しみにしていて下さい。

▼毎月の禊会や大倭の諸行事等もコロナ禍以前と同じように実施していきますので、進んでご参加下さい。

▼大倭会会則により役員の任期が2年とされているので、会計監査が柴地暁子さんから竹内靖さんに交代することになり、大倉ひろ枝さんはご都合で副会長を退任されることになりました。他の役員は再任となりますので、これからもよろしくお願いいたします。（岸田哲）

▼群馬県安中市　**櫻井節子**

大倭会の皆様お変わりありませんか。ご無沙汰しております。あれ程に待ち望んでいた春（桜）もあっという間に北上してしまい、入れ替わって南から雨雲を携えて列島を一面緑に染めていく。この大自然のみごとな営みは、一言で言ってしまえば、私にとってはわかりやすい「神業」です。今回も出席できませんが宜しくお願いします。

昨年秋の佐渡旅行では、幹事の皆様をはじめ、いくつもの資料もそろえて頂き、大変お世話になりました。

最初に訪れたのは順徳上皇陵でした。説明により平田さんが上皇の転生された方と知り、このことを通しても、人の誕生の深い意味や霊界とのつながりを強く意識せざるをえません（うつしみだから）。参詣できて本当に良かったと思います。

佐渡は何しろ初めてなので、私のイメージとは異なり案外住みやすいのでは……しかし、時は鎌倉時代、罪人送りの島で閉ざされた世界は、鳥も通わぬと言いますし、北海の寒さと荒れた環境の中での日蓮聖人の生活は想像を絶します。命があることがとてもふしぎです。

日蓮聖人のご縁の寺を巡り、妙照寺で長女（内田誓子）が話しかけてきました。「何か感じた？感度が悪いので何も感じないよ」。そうなんだ、私もそうだと言いました。「静か過ぎて何も変わらんね」、そんな会話をしながらバスに乗りました。

後で解ったことです。『おおやまと』12月号に杉本さんが、「無言の日蓮さんだった」と書かれていて、そうだったのかと私達なりに納得しました。

桃華園のおもてなしにとても感謝です。無邪気なお孫さんの太鼓の音が耳に残っていて、平田家総動員で頑張っている姿にエールを送らずにはいられません。いつかまたおじゃましたいと思います。

「マジシャン且田」は、書道で筆をあやつる他に、こんな隠し技もお持ちですばらしい。ただの人ではなかったのですね。指先がスムーズで神業のようでした。

天候にも恵まれ、霊界の話しも気兼ねなく普通にできて、何て楽しい仲間だろう、もう一日一緒にいたい、そう思えた記念すべき旅でした。皆さん、ありがとう。（新皇教宮）